

5 . 水利用の現状

5 - 1 利水事業の変遷

近年の肱川水系の水資源開発は、昭和 28 年の鹿野川ダム建設着手に始まり、昭和 57 年の野村ダム完成により現在に至っている。

宇和海に面する南予地域は、リアス式海岸に迫る地形的要因によって古くから慢性的に用水不足に悩まされてきた。昭和 42 年には大旱魃が発生し、南予地方や瀬戸内の島々では水源が枯渇し、生活用水にも事欠くとともに農作物に大きな被害を与えた。

一方、発電用水に関しては、明治末期から小規模の発電ながら発電所が建設されており、鹿野川ダム(肱川発電所)の建設により、発電が行われるようになった。

このため、肱川水系の工事实施基本計画では、流域内および流域外の各地域における農業用水および都市用水の需要の増大に対処するため、既設の鹿野川ダムのほか、野村ダムの多目的施設の建設により水資源の広域的かつ合理的な利用の促進を図ることとしている。



図 5-1(1) 野村ダムによる受益地区と幹線水路網

出典：パンフレット『野村ダム』



図 5-1(2) 鹿野川ダム

出典：大洲工事事務所

5 - 2 水利用の現状

肱川の用途別の取水量としては、平成 14 年現在で発電に 4 件で最大 36.740 m³/sec の取水が行われ、同様に、水道用水は 26 件で 0.664m³/sec、工業用水は 5 件で 0.101 m³/sec、農業用のかんがい用水は、113 件で 6.691m³/sec などの取水が行われている。

発電に関しては、明治末期より小規模ながら発電所の建設がなされており、現在稼働している発電所は、四国電力（最大出力 5,000KW）のほか、愛媛県所轄の肱川発電所（最大出力 10,400KW）の 4 施設がある。

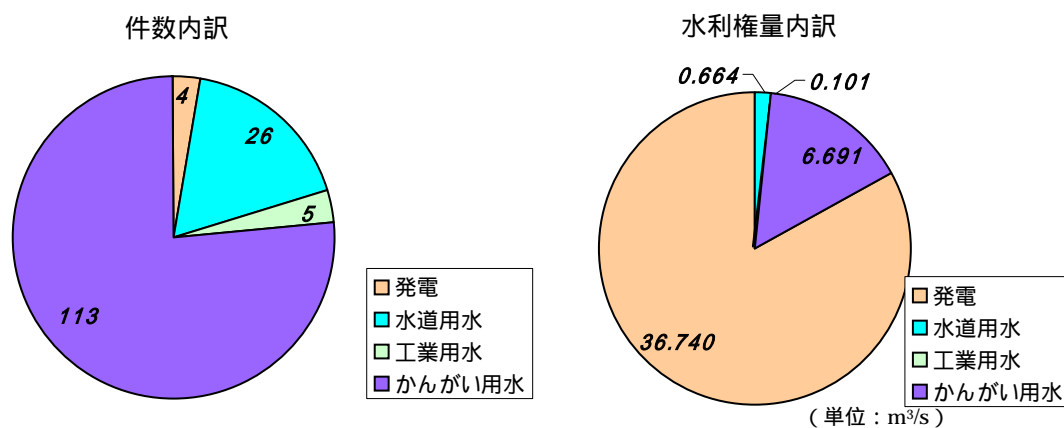
用水取水は、そのほとんどを農業用が占めており、かつては溜池や支川筋からの取水が主で、肱川本川への依存は少なかったが、揚水機械の発達や農業技術の向上とあいまって、その利用度は向上してきた。また、近年は、畑地かんがいも多くなった。

一方、都市用水のうち水道用水は、生活様式の向上、施設の整備とあいまって増加するものと思われるが、工業用水は取水施設の数も少なく、大規模な用水型工場もないので、その取水量はわずかである。

表 5-1 肱川の水利用（平成 14 年 4 月 30 日現在）

用途別	実績	
	件数	水利権量
発電	4 件	36.740
水道用水	26 件	0.664
工業用水	5 件	0.101
かんがい用水	113 件	6.691

出典：四国地方整備局



水取排水図

5 - 3 渇水状況等

肱川流域は、同じ瀬戸内海に注ぐ重信川や土器川に比べ比較的豊かな水量を有しており、平成 6 年の大渇水においても特に渇水による被害は受けていないが、鹿野川ダムの電力需要に対応したピーク発電放流により、一日のうちで水量が大きく変化している。特に、冬季においては、無放流の時間帯があることから、水量変動が大きい。

5 - 4 内水面漁業

漁業権

肱川における漁業権としては、鹿野川ダム下流の本川及び支川については肱川漁協が、鹿野川ダム上流については肱川上流漁協が内水面漁業権を有している。河口部においては、長浜町漁協が貝類の漁業権を河口から小浦地先の区間で、アオノリの漁業権を河口から(旧)柿早橋の区間で所有している。

表 5-2 肱川において漁業権の設定されている漁種

魚種	漁協名	漁期設定期間
あゆ	肱川漁協、肱川上流漁協	6/1～12/31
こい	〃	通年
うなぎ	〃	通年
あまご	〃	2/1～9/30
ふな	肱川上流漁協	通年
あさり・えむし	長浜町漁協	通年
あおのり・のり	〃	10/1～5/31

漁獲高及び範囲

肱川漁協での捕獲魚種は、アユ、ウナギ、アマゴなどで、なかでもアユの漁獲高が圧倒的に多い。

肱川水系の漁獲量は愛媛県内でも非常に多く、県内の内水面漁業の約7～8割のシェアを占めている^{*1}。

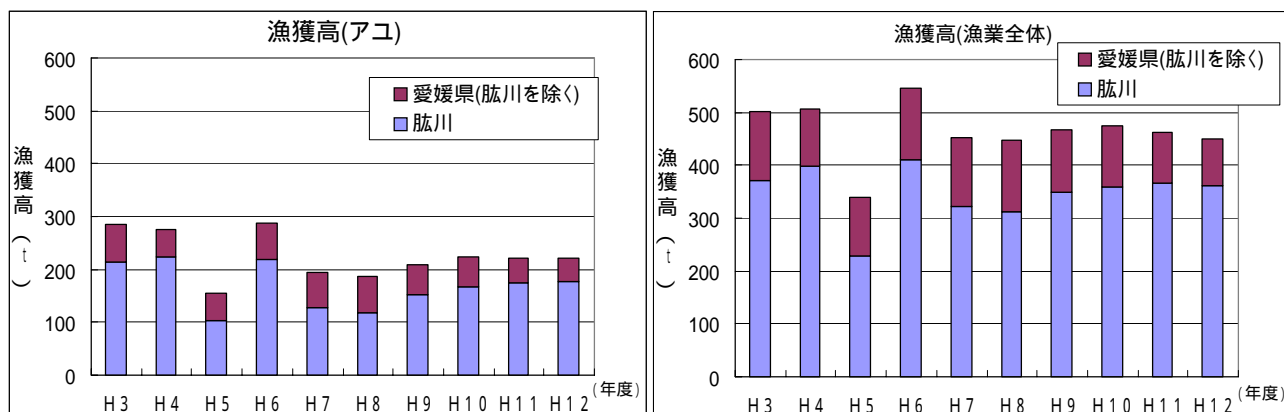


図 5-2 漁獲高

出典：愛媛農林水産統計年報

これら魚種の捕獲範囲は鹿野川ダム下流の大洲市、喜多郡、^{かみうけなくん}上浮穴郡小田町、伊予郡中山町、広田村と広範囲にわたっている。

肱川本川での夏場のアユ漁は、ほぼ全域でおこなわれており、瀬・淵を問わない。一方、秋口になると産卵のために下流へ下るアユを捕獲する瀬張り網漁などが行われている。

*1 愛媛農林水産統計年報：内水面漁業統計調査の結果より